全国組織関係団体活動報告

全日本実業団剣道連盟
理事長
小杉（こすぎ） 信太郎（しんたろう）

実業団剣道の最近の状況と若干の私見について申し上げる。

1、（全日本実業団剣道大会）例年9月中旬の敬老の日に日本武道館で開催しており、昨年は9月21日（月祝）に第58回を過去最多の359チームが参加して行われた。

第1回は昭和33年9月21日に東京後楽園ジムナジュウムに於いて75チーム参加でスタートし、来年は60回の区切りの大会となる予定だが、会場となる日本武道館の改修計画次第でどうなるか気を揉んでいるところである。連盟の会員数は北海道から沖縄に至るまで合計433だが、参加数はこの83％に当たり、ここ数年は漸増傾向にある。試合は5人制のトーナメント方式で、勢いのある若手を擁するチームの活躍が目立つが、徒に勝負に拘泥することなく秩序あり気品ある、いわゆる当てっこでない剣道を期待したい。

2、（全日本実業団女子・高壮年剣道大会）近年の女子剣道人口の増加を背景として、また、生涯剣道の観点から、東京武道館で開催することになり、第1回は平成10年3月21日実施。今年は第19回を3月5日㈯に女子団体（3人制）が112チーム、高壮年個人（40才以上）は五段以下が304名、六段以上が533名参加して行われた。参加数はこちらも漸増傾向にあり、特に高壮年は40才到達組が満を持して挑んできており、六段以上では、その初出場選手が優勝を果たした。なお、女子の部の審判は主任を除き女性主体で編成しており、また、開会式では女性による日本剣道形の演武を行っている。

3、さて、小生の個人的な話になるが、今を去る60年前、大学の剣道部に入部した際、一本の剣道用日本手拭を頂戴した。それには、木下壽徳先生㈱による流麗な草書体で「道に遊ぶ」と書かれていた。当時の小生にはその意味も分からず、現在も充分理解していないが、多分それは、永年剣道の修行に邁進された先生の剣道の極致、心境を書いたものと推察している。

4、先生には、『剣法至極詳伝』の著書がある。剣道でいう色や欲、また、懼について、その「剣法至極の道程（二）」に次の叙述がある。

「始めて剣を学ばんと欲せば円形の情態より直ちに三角形に変ず変ずると同時に起るものは色、慾、恐懼の念是なり茲に謂う色とは表面に顕わるゝ色にあらずして内心に生ずる色気なり例えば先生の言の如く打ち懸からんと思うと雖も何となく極り悪く感じ或いは姿勢の見悪からずや人の嘲笑を受けずやなど思い惑いて心を専にする能わざるをいうなり始めて竹刀を執りしばかりなるを早く意の如く打つようになりたしとか或いは早く強くなっても見たしなど柄にもなき慾心の萌すあり慾気とは即ち是なりかくの如きは単に剣法のみならず万事に纏綿するを常とす而して色慾なるものは漸時薄らぐべしと雖も奥義に達するにあらずんば全然その根を断つこと難かるべし初心者の病としては単に色慾の二者に限らずなお外に恐懼なるもの附着せり打ちもせざるを先生の太刀先が目に映ずれば只管打たるゝものとのみ思い目をつむり恐れ縮むことあるは末だしもなれど甚だしきに至っては自己の打ち込む太刀にすら目をつむるが如き有様にて其滑稽譬うるに物なし然れども暫く忍んで学ぶこと深ければやがて一段進みて次の図（四角形）の如きに域に達す」。

まさに、云いえて妙である。剣道愛好家の方々には是非同書の一読を推奨する次第である。

5、ところで、この5月に行われた京都武徳殿での演武大会で、101才、範士七段の方が演武されたが、京都新聞によれば、同氏は毎日300回の素振りをなさっているとか。まことに頭の下がる思いである。

小生の通う道場にも数名の90才の先輩が矍鑠として稽古されており、大きな声（気合）を出し、年齢性別体格相応に心身を動かし、人と接触（会話）し、時にほろよいの酒を楽しむは我々の目標とするところでもある。医療や介護に頼らず、剣道に頼って健康寿命を全うしたいものである。

㈱1855年生、1927没。警視庁撃剣世話掛、東京帝国大学剣道部師範を務めた。大日本武徳会に参加しなかった為、範士等の称号を持たなかった。代々、幕臣の御番医師を務める木下家の次男として生まれ、徳川家の駿河移封に随伴し、1869（明治2年）、開墾方頭・中條金之助に牧之原で茶園栽培の傍ら剣術を学んだ。1872年牧之原を離れ東京の道場を転々としながら修業を重ねる。明治20年代、警視庁撃剣世話掛就任、1907（明治40年）3月、東京帝国大学剣道部師範就任。警視庁時代に片目を失明したため主に理論で指導した。

連盟事務局
〒111−0032 東京都台東区浅草7−1−7 宇賀神ビル3F
電話・FAX 03・5603・2601
メール taikai@j-kendo.jp
ホームページ http://www.jp-kendo.jp